

「次世代育成のための小中学校生の体験学習や職場体験受入れ等状況調査」 結果報告

●調査目的

東社協地域福祉推進委員会では、小中学校と福祉施設・事業所との連携による体験学習や職場体験の多くがコロナ禍に休止となったことをふまえ、これらの体験機会の再開と次世代育成に向けた学習内容の変化の状況を把握し、必要となる取組みを提言するため、本調査を実施した。

●調査期間 令和7年1月16日～2月21日

●調査対象 東京都社会福祉協議会 業種別部会連絡協議会 会員施設・事業所

●回答数 366 施設・事業所

(内訳)

高齢施設・事業所 = 75 (20.5%)

▶ 特別養護老人ホーム (46)、養護老人ホーム (3)、軽費老人ホーム (7)、老人保健施設 (3)、地域包括支援センター (3)、高齢居宅サービス事業所 (13)

保育所・こども園 = 138 (37.7%)

児童・女性施設 (保育を除く) = 38 (10.4%)

▶ 児童養護施設 (17)、自立援助ホーム (3)、乳児院 (3)、母子生活支援施設 (14)、女性自立支援施設 (1)

保護施設 = 15 (4.1%)

▶ 救護施設 (3)、更生施設 (12)

障害福祉施設・事業所 = 93 (25.4%)

▶ 児童・身体 (1)、児童・知的 (12)、成人・身体 (14)、成人・知的 (64)、成人・精神 (2)

その他 = 7 (1.9%)

1 「地域における公益的な取組み」での取組み状況

- 「地域における公益的な取組みで福祉教育・次世代育成のための取組みを実施している」と回答したのは、**210 施設 (60.3%)** ※「社会福祉法人が運営する施設ではない」と回答した 18 施設を除いた割合) だった。
- 「実施していたが、コロナ禍で休止した」と回答した **29 施設 (8.3%)** ※「社会福祉法人が運営する施設ではない」と回答した 18 施設を除いた割合) とあわせると 7 割近い施設が「地域における公益的な取組み」で福祉教育・次世代育成のための取組みを実施していた。

回答	回答数	%
「地域における公益的な取組み」で福祉教育・次世代育成のための取組みを実施している	210	60.3
実施していたが、コロナ禍で休止した	29	8.3
実施していない	109	31.3
合計	348	100

※「社会福祉法人が運営する施設ではない」が 18 施設

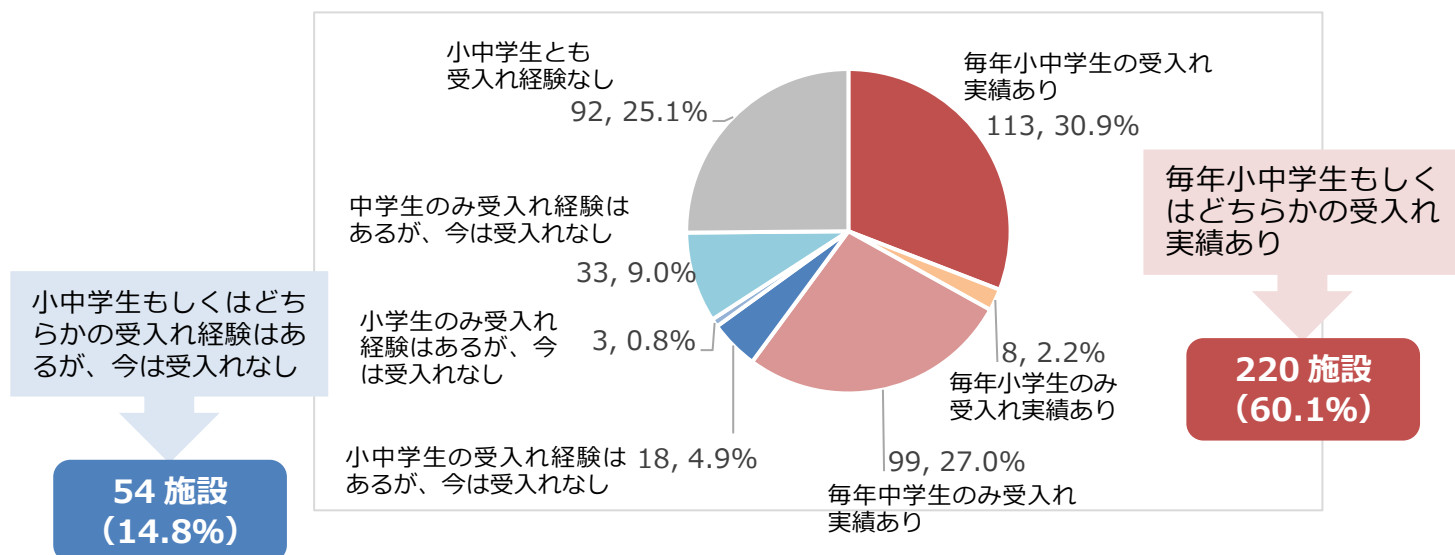
＜地域における公益的な取組みで実施している福祉教育・次世代育成のための取組み＞※抜粋

- ・子どもから高齢者まで交流できるイベントや教室を定期的に開催（高齢）
- ・学校で行う地域探検のコースに当施設を組み入れてもらう（障害）
- ・見学を実施し、その後交流として体育館に事業所利用者が訪問する形で一緒にポッチャを楽しむ交流（障害）
- ・特別学級の生徒が2～3名、生活介護と学童クラブに1日職場体験（障害）
- ・子育て広場事業（保育・児童）
- ・地域の小学生に声をかけ、学園にて入所児童と共に遊びの企画を通して交流（児童）
- ・妊娠されている方や出産後3か月未満のお子様がいる家庭対象で「産前産後」を実施（保育）

2 職場体験・体験学習の受入れ状況

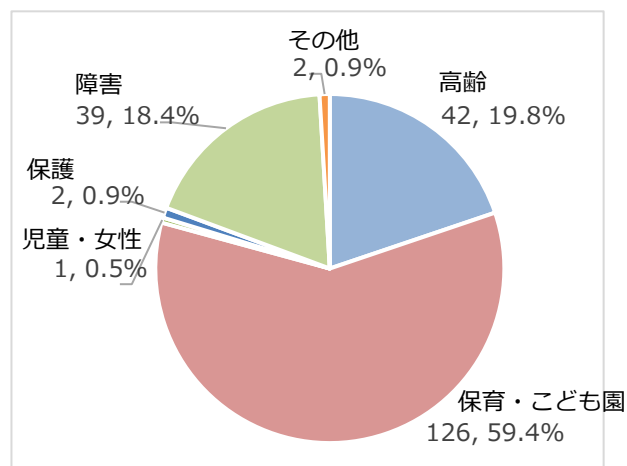
- 「毎年、小学生および中学生の受入れ実績がある（＝今年度もある）」・「毎年、小学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）」・「毎年、中学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）」と回答した施設は合計で **220 施設（60.1%）** となり、半数以上の施設が毎年小中学生（もしくはどちらか一方）の受入れ実績があった。
- 一方、「小学生および中学生を受け入れたことはあるが、今は受け入れていない」・「小学生のみ受け入れたことはあるが、今は受け入れていない」・「中学生のみ受け入れたことはあるが、今は受け入れていない」と回答した施設は合計で **54 施設（14.8%）** であり、受入れ経験があるものの現在は受入れていない状況も見受けられた。

回答	回答数	%
毎年、小学生および中学生の受入れの実績がある（＝今年度もある）	113	30.9
毎年、小学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）	8	2.2
毎年、中学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）	99	27.0
小学生および中学生を受け入れたことはあるが、今は受け入れていない	18	4.9
小学生のみ受け入れたことはあるが、今は受け入れていない	3	0.8
中学生のみ受け入れたことはあるが、今は受け入れていない	33	9.0
小中学生とも受け入れたことはない	92	25.1
合計	366	100



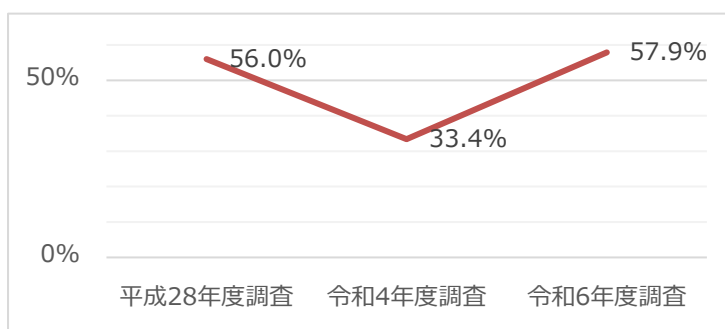
- 中学生を毎年受入れている施設（「毎年、小学生および中学生の受入れの実績がある（＝今年度もある）」・「毎年、中学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）」と回答した施設）に限った種別ごとの状況では、**保育所・こども園**が最も多く **126 施設（59.4%）**であった。

回答	回答数	%
高齢施設・事業所	42	19.8
保育所・こども園	126	59.4
児童・女性施設(保育を除く)	1	0.5
保護施設	2	0.9
障害福祉施設・事業所	39	18.4
その他	2	0.9
合計	212	100



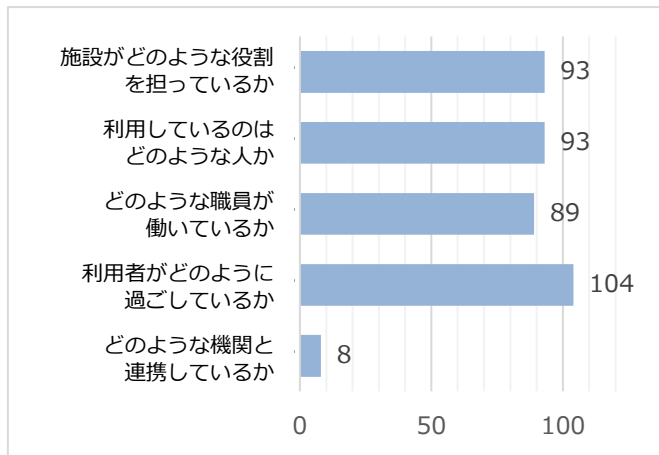
- 中学生を毎年受入れている施設（「毎年、小学生および中学生の受入れの実績がある（＝今年度もある）」・「毎年、中学生のみ受入れの実績がある（＝今年度もある）」と回答した施設）に限ったコロナ前後の比較では、やはりコロナ禍では感染対策等の影響で受入れ状況が下がったものの、今回の調査ではコロナ禍前まで受入れ状況が回復していた。

年度	%
平成 28 年度調査	56.0
令和 4 年度調査	33.4
令和 6 年度調査	57.9

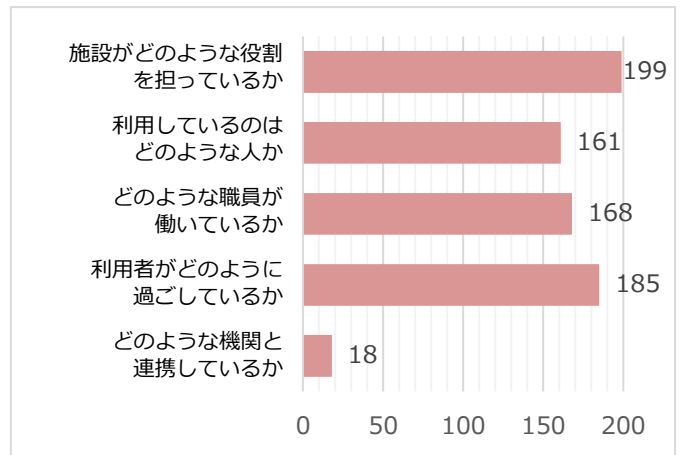


- 毎年、**小学生を受入れている**と回答した 121 施設を対象に、職場体験や体験学習の受入れにあたって、施設・事業所として子ども達に感じ取ってもらいたいことを聞いたところ、「**利用者がどのように過ごしているか**」が 104 件（86.0%）で最も多く、次いで「施設がどのような役割を担っているか」、「利用しているのはどのような人か」が各 93 件（76.9%）であった。
- 毎年、**中学生を受入れている**と回答した 212 施設を対象に、職場体験や体験学習の受入れにあたって、施設・事業所として子ども達に感じ取ってもらいたいことを聞いたところ、「**施設がどのような役割を担っているか**」が 199 件（93.9%）で最も多く、次いで「利用者がどのように過ごしているか」が 185 件（87.3%）であった。
- 小学生が対象だと「利用者のことを知ってもらいたい」という思いが強く、中学生が対象になると「施設のことを知ってもらいたい」と思う傾向となった。

＜小学生に感じ取ってもらいたいこと＞



＜中学生に感じ取ってもらいたいこと＞



＜小学生に感じ取ってもらうために特に力を入れて伝えようとしていることや伝え方の工夫＞※抜粋

- ・高齢者とのふれあいに慣れていない児童が増えてきているので、コミュニケーションの取り方からアドバイスをする（高齢）
- ・子どものおむつを変えたり食事介助したり、また子どもとは関係の無いように見えるお掃除や洗濯、環境整備のお仕事から連絡帳などの記録も大事な仕事であること（保育）
- ・小さな子どもと接することは楽しい、かわいいと感じてほしい。自分より小さなものを大切に思う気持ち。（保育）
- ・障害があるなし関係なく、同じ地域で暮らしている仲間であること（障害）
- ・障がいがある方への支援において、相手を知ることが大事にしていることを伝える（障害）

＜中学生に感じ取ってもらうために特に力を入れて伝えようとしていることや伝え方の工夫＞※抜粋

- ・福祉と言っても、職業は幅広く、介護福祉士以外にも、社会福祉士など、看護師、作業療法士などこれからの進学に向けての仕事の役割などを説明もしている。（高齢）
- ・ただ子どもたちと触れ合うだけでなく、体験学習の3日間、年齢の異なるクラスに入ってもらい、年齢の差を感じられるようにする。振り返りや中学生からの疑問・質問などに答える時間を設け、同時に保育所の役割等も知ってもらえる機会にする。（保育）
- ・中学生にも本を読むなど、何か得意なことを子どもたちにやってもらうようにして、関りを深めるだけでなく、保育者の立場も少しだけでも理解できるようにしている。（保育）
- ・障害のある方と一緒に作業や活動を楽しんで体験してもらう中で施設の様子や役割、障害者の特性や理解などを伝える（障害）

●コロナ禍での受入れ状況について、「コロナ禍も受け入れていた（実施方法を変更しての受け入れも含む）」と回答した施設は **80 施設（21.9%）** だった。

●休止期間を回答したのは 148 施設で、令和 2～4 年度を中心に緊急事態宣言や 5 類移行をきっかけに再開していることが多かった。

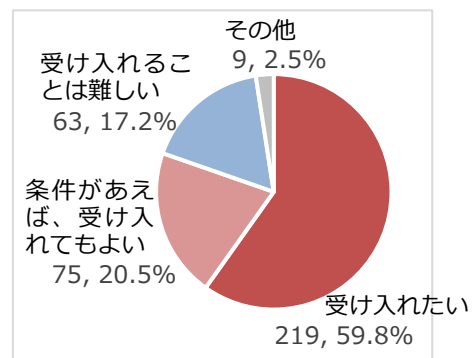
回答	回答数	%
コロナ禍も受け入れていた(実施方法を変更しての受け入れも含む)	80	21.9
コロナ禍は受入れを休止したが、現在は再開した(実施方法を変更しての受け入れも含む)	148	40.4
コロナ禍に休止し、今も再開していない	34	9.3
小中学生とも受け入れたことはない	104	28.4
合計	366	100

●コロナ禍での継続や再開にあたって苦慮したことの有無を聞いたところ、96 施設が「ある」と回答した。内容として、消毒やマスクの着用、1 週間前からの体調管理、PCR 検査等の実施などの感染対策が多く挙げられたが、「訪問先の学校で感染症が流行するなど日程調整等が必要になった」「面会の制限がある中での実習生等の受け入れに対して、ご家族にご理解を得ることに苦慮した」「職員の入れ替わりで未経験の職員が多い」などの意見もあった。

●コロナ禍をふまえて実施方法の変更の有無を聞いたところ、59 施設が「ある」と回答した。内容として、「直接の接触が少なくなるように配慮」「受入れ人数を調整し、密な状況をなくす」「一緒に食事をしなくなった」「屋外での活動を増やした」などの意見が挙げられた。

●小中学生の職場体験や体験学習の受入れに関する今後の意向について聞いたところ、「小中学生の職場体験や体験学習を受け入れたい」「条件があれば、小中学生を受け入れてもよい」と回答したのは 294 施設（80.3%）だった。小中学生の体験機会について確保したいと考えている施設が大多数となった。

回答	回答数	%
小中学生の職場体験や体験学習を受け入れたい	219	59.8
条件があれば、小中学生を受け入れてもよい	75	20.5
小中学生の職場体験や体験学習を受け入れることは難しい	63	17.2
その他	9	2.5
合計	366	100



<小中学生の職場体験や体験学習を受け入れたい理由> ※抜粋

- ・少子高齢化で介護に携わる人が少なくなっていくと思うので将来介護の仕事につくかは別としていろいろ体験していただきたい（高齢）
- ・職場体験等にきた小中学生たちの、将来進む道の選択肢になればよい。また、こども園の子どもたちも、様々な人と触れ合うことが大切であると考え（保育）
- ・障害を持っている方が、同じように普通に近所で過していることを、普通に受け入れてほしいから（障害）
- ・小中学生が来ることで、作業所の利用者さんたちにも人生の先輩として振る舞うことへの意識が生まれたり、健常者と共に交流することへの苦手意識がある場合の私たちに役立つと考えている（障害）
- ・施設の性格上、受け入れることが難しい状況が全くないとは言いきれない。同様に感染症対策についても、受け入れ予定日に感染症罹患者が発生した場合、中止等の措置を講じざるを得ず、その点についても理解を求めたい。（保護）

<小中学生の職場体験や体験学習を受け入れが難しい理由> ※抜粋

- ・施設内に同級生や年齢の近い児童が入所しているから（児童・女性）
- ・行動障害のある方を受け入れており、体験学習に来た児童・学生が怪我をするリスクが高い。（障害）

4 『福祉施設における中学生の職場体験 受入れハンドブック』について

- ハンドブックを知っているかどうか聞いたところ、知っているとは回答したのは117施設（32.0%）だった。

回答	回答数	%
知っている	117	32.0
知らなかった	249	68.0
合計	366	100

- 「知っている」と回答したうち、活用している（したことがある）とは回答したのは34施設（29.1%）だった。

回答	回答数	%
職場体験の際に様式等を今も活用している	19	16.2
以前は活用したことがあったようだが、今は活用していない	15	12.8
職場体験は来ているが、活用していない	36	30.8
職場体験が来ていないので、活用していない	41	35.0
わからない	6	5.1
合計	117	100

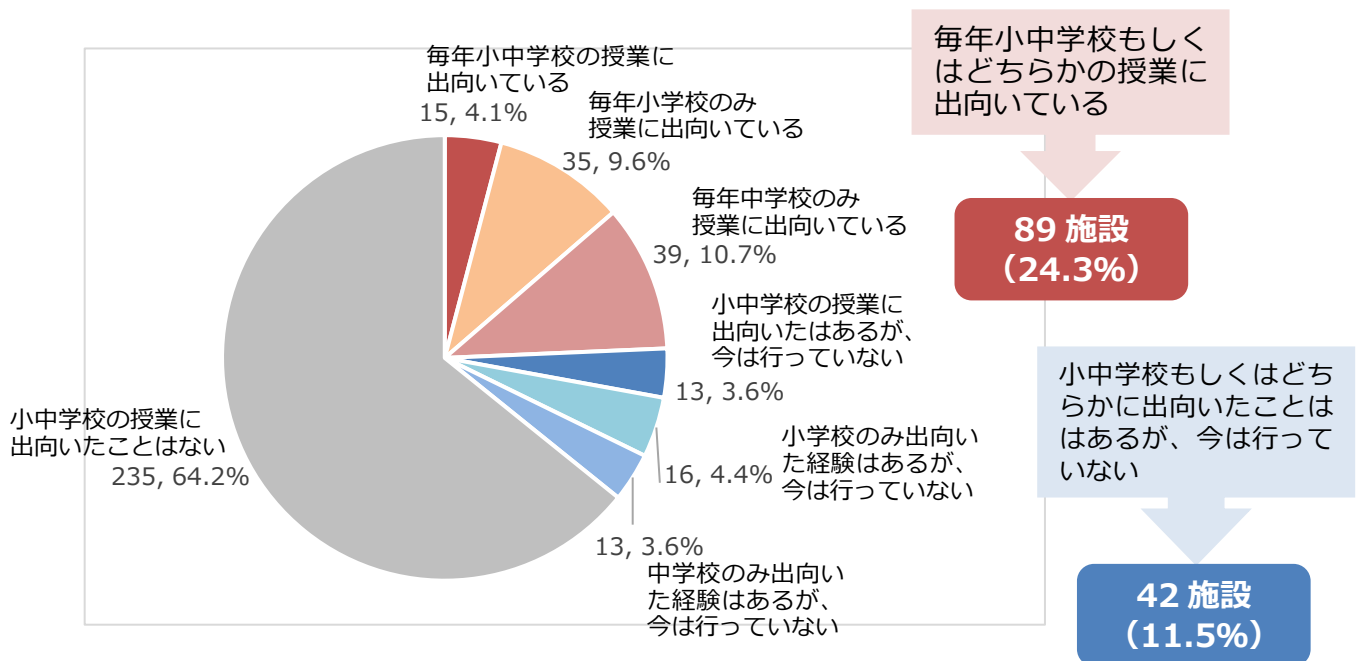
活用している
（したことがある）

34 施設
(29.1%)

5 小中学校へ出向いての授業等の実施状況

- 「毎年、小学校および中学校の授業に出向いている」・「毎年、小学校の授業に出向いている」・「毎年、中学校の授業に出向いている」と回答した施設は合計 **89 施設（24.3%）** で、体験学習等の受入れより実施率が低い結果となった。
- 「小学校および中学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない」・「小学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない」・「中学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない」と回答した施設は合計で **42 施設（11.5%）** であり、6 割以上の施設が「出向いたことはない」と回答した。

回答	回答数	%
毎年、小学校および中学校の授業に出向いている	15	4.1
毎年、小学校の授業に出向いている	35	9.6
毎年、中学校の授業に出向いている	39	10.7
小学校および中学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない	13	3.6
小学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない	16	4.4
中学校の授業に出向いたことはあるが、今は行っていない	13	3.6
小中学校の授業に出向いたことはない	235	64.2
合計	366	100



< 小学校へ出向く授業等で行っている内容 > ※抜粋

- ・認知症サポーター養成講座を行っている（高齢）
- ・例年2月ごろ、5歳児が小学校を訪問し小学校の紹介をしてもらっている（保育）
- ・車いす体験（バスケットボール）（障害）
- ・点字、ガイドヘルプ、ブラインドテニス、手話、車いす等の体験、クロスロードゲームの実施（その他）

< 中学校へ出向く授業等で行っている内容 > ※抜粋

- ・認知症サポーター養成講座を行っている（高齢）
- ・5歳児が家庭科の時間に訪問し、幼児と関わったり手作りおもちゃ等で遊んでもらっている（保育）
- ・障害当事者の話、困っているときに助けてほしいこと、視覚障害者の手引きの仕方、点字の書き方（障害）

- コロナ禍での実施状況について、「コロナ禍も授業を行っていた（規模の縮小やオンラインも含む）」と回答した施設は **23 施設（6.3%）** だった。
- 休止期間を回答したのは 15 施設で、体験学習と同様令和 2～4 年度が中心だった。また「コロナ前に行っていた学校との再開はできていないが、今年度より新たな学校で開始している」との回答もあった。

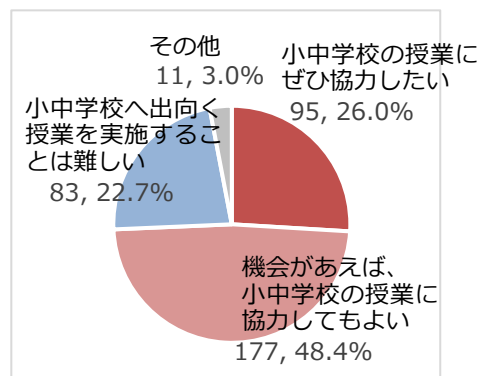
回答	回答数	%
コロナ禍も以前と同じように出向き授業を行っていた	14	3.8
コロナ禍は規模を縮小して授業を行っていた	7	1.9
コロナ禍はオンラインで授業を実施した	2	0.5
コロナ禍は授業を休止したが、現在は再開した	40	10.9
コロナ禍に休止し、今も再開していない	27	7.4
小中学校の授業に出向いたことはない	276	75.4
合計	366	100

コロナ禍も
授業を行っていた

**23 施設
(6.3%)**

- 小中学校へ出向く授業に関する今後の意向について聞いたところ、「小中学校の授業にぜひ協力したい」「機会があれば、小中学校の授業に協力してもよい」と回答したのは 272 施設 (74.3%) だった。実際に授業に出向いている施設と協力の意思がある施設には大きな乖離がある結果となった。

回答	回答数	%
小中学校の授業にぜひ協力したい	95	26.0
機会があれば、小中学校の授業に協力してもよい	177	48.4
小中学校へ出向く授業を実施することは難しい	83	22.7
その他	11	3.0
合計	366	100



- 小中学校との連携にあたって、学校側が福祉施設・事業所に期待する学習内容の変化の有無を聞いたところ、「小中学校が期待する学習内容に変化を感じる」と回答したのは 104 施設 (28.4%) だった。

< 学校側が福祉施設・事業所に期待する学習内容が変化を感じる内容と取組みの工夫 > ※抜粋

- ・共生社会を意識する授業内容に変化したため、当センターの取組みを授業に反映することが、より活きていると感じている (高齢)
- ・学校の授業にはあまり関心を示さない生徒も、施設での体験中、生き生きと活動しているのを見て、巡回の先生が新たな発見と言われた (高齢)
- ・能登半島地震後、これまであまり依頼がなかった災害についての話とクロスロードゲーム実施希望が増えた (保育)
- ・近隣の小学校でも令和6年度よりスタートカリキュラムを取り入れて、入学したばかりの1年生が徐々に小学校に慣れていけるような工夫をしていて、保育園等でも小学校への進学を見越した幼児教育を求めているように感じた (保育)
- ・幼保小連携推進委員会の中でお互いの様子を伝えたり、実際に見学に来てもらうことにより1年生になった時にどんなことができるのか、わかるのか、どのようなことができるようになっていれば不安なく過ごせるのか等共通理解が持てるようになった (保育)
- ・小学生がパラリンピックを観て車いすバスケットに興味を持ったとのことで、今年度は車いす体験の際に車いすに乗ってシュートをするコーナーを設けた (障害)
- ・地域との連携強化、開かれた学校作り、総合の授業にある「福祉」では実際の施設との連携を希望するケースが増えている (障害)
- ・大学や専門学校等において、学生の福祉への興味がかなり薄れている実感があると各学校の実習担当の教師から話を伺う機会が多くなった。小中学校ではもともといろいろな企業をお呼びして環境のことを考えるなどの授業をおこなっているところもあるが、福祉においても同じように、施設の職員を呼んで話をしてもらうなど、福祉への興味・関心を伸ばそうと取り組みをおこなう所が増えているように感じる (障害)
- ・多様性を重視した内容やサステナブルに関連する内容に変化している (その他)

- 小中学校と連携した次世代育成をすすめるうえでの課題について聞いたところ、「学校側がどのような時期にどのような学習を行っているのかわからない」が最も多く 140 施設 (38.3%)、次いで「学校と連携したいが、どのようにアプローチしたらよいかわからない」が 110 施設 (30.1%) であった。学校側の状況がよく見えないというのが課題であることが感じられた。

